

6月10日は時の記念日。

1920年（大正九年）に東京天文台（今の国立天文台）と当時の文部省の外郭団体だった生活改善同盟会によって、時間の大切さを尊重する意識の向上を狙って制定されました。

当時はまだ時間に対して緩やかだったとされており、これを欧米並みに改善し合理化や効率化を図ることで先進国への仲間入りを目指したとされています。

時の記念日には記念行事も

この1920年には5月16日から7月4日まで「時の展覧会」を生活改善同盟会が行っています。期間中の6月10日を時の記念日と定めたわけですが、当時は時の記念日の周知に大変力を入れており、以後20年以上に渡り全国各地で記念行事が行われてきました。現在でも兵庫県明石市の「時のウィーク」や滋賀県大津市の近江神宮で行われる「漏刻祭」、富山県富山市に残る「ドン花火」などにその名残が見られます。

また6月10日とした由来については日本書紀の中に日本で最初の時計（水時計）が鐘を打った日として記述があったためです。



今も当時の習慣が言葉として残っています



明治時代からこの時の記念日が制定される大正10年頃までは正午を知らせるにあたって大砲を撃ち知らせていました。しかし非常に予算がかかることから徐々にサイレンに切り替えられました。既にその正午のサイレンも時報になって使われることはほぼなくなりましたが、現在も午前中で学校や仕事を切り上げることを指す「半ドン」という言葉に大砲を撃っていた頃の名残を見ることができます。

今の日本は公共交通機関の定時運行率が世界一と言われるほどにまでなりましたが、これはこうした先人たちの努力があってこそなのでしょうね。

